

國學院大學学術情報リポジトリ

生命と力：
フーコーの「バイオ・パワー」概念をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀧本, 往人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000780

生命と力——フーコーの「バイオ・パワー」概念をめぐって

瀧 本 往 人

キーワード

フーコー バイオ・パワー 知 生命 倫理

はじめに

本論考は、二十世紀フランスの代表的な哲学者であるミシェル・フーコー(Michel Foucault)が提示した「バイオ・パワー」(bio-pouvoir)という概念を手掛かりにして、倫理における「力」という問題を考えようとするものである。

なお、この「バイオ・パワー」という語は、一般的に「生・権力」「生命・権力」と訳されてきたものであるが、本論考ではあえてカタカナで表記する。その理由の詳細は本論で展開するが、簡潔に述べるならば、「バイオ・パワー」というものが、従来の「権力」概念では説明し難く、たとえば「生・権力」と書いてしまうと、ここで論ずるテーマを見失わせるおそれがあるからである。

本論考の構成については、前半部では、フーコーがいかにしてこの「バイオ・パワー」という概念を用いるに至ったのかをたどるのに充てられる。

第一章では、フーコーの初期の著作である『臨床医学の誕生』から「生命」と「力」の関係の発見の発端を見出す。この書においてフーコーは、十八世紀に解剖学が「死」を死体の内側からとらえ、その結果「死」が身体に分散しているさまを明らかにした、ととらえる。この光景をもって、フーコーは「生命」への「力」の介在の出発点としたのではないかと仮定した。次に、第二章では、彼の代表作である『言葉と物』における、古典主義時代から近代的な知への移行の分析のなかの「博物誌」から「生物学」への転換に焦点をあてる。ここではフーコーは「生物学」が「博物誌」とは不連続に、「人間」に関する「知」の一つとして生成したと主張している。この書では用いられていないが、その後提起された重要な概念である「力・知」(pouvoir-savoir)からみて、フーコーによる「生物学」の分析の意味を解釈し、「知」が「生命」の学を構成するという「力」を作動させたという意味ではないかととらえる。

後半部では、実際に獲得した「バイオ・パワー」とその相関関係にある「ディシプリン・パワー」について説明を行い、そのうえで、これらの概念が倫理の問いにおいてどういった作用をもたらすのかを検討してみる。

第三章では、その具体的な「力」の一つとして、『監獄の誕生』において展開された「ディシプリン・パワー」について概観する。「ディシプリン・パワー」が単に「知」のみならず、実際の空間や身体において作用するものであり、一般的に管理社会批判の文脈で論じられるテーマとの近親性を持ちながらも、フーコーがこれを引き離そうとしていたことを明らかにする。これはまさしく、この「ディシプリン・パワー」と相関する「バイオ・パワー」が提示されたことによって可能となった。第四章では「バイオ・パワー」について、フーコーの論点を素描してみる。すでにヘーゲルが提示した相互承認論や「権力」という言葉を用いるのが困難なほどに「バイオ・パワー」は、間接的かつ曖昧に「環境」全体を構成しているか、もしくはさりげない「装置」として作用しているので、既存の「権力」概念で思考しがちな私たちはこの「力」との向き合い方に苦慮していると考えられる。

それに対して、第五章では、「バイオ・パワー」との向き合い方の可能性として、特に「アウシュヴィッツ」に焦点をあてた研究が主流であるなかで、あえて「アトム・パワー」を「バイオ・パワー」の後継もしくは類似した概念として提唱する。「倫理」における「力」とは、単純に実践や行為にかかわる、ということではなく、むしろ「倫理」における「知」を磨きあげることこそが「力」であると結論づける。

一 「生命」の発見と「死」への「まなざし」

一九六三年に初版が刊行された『臨床医学の誕生』におけるフーコーの探究の一つの柱は、解剖学において見出された「死」へのまなざしに関するものだった。⁽²⁾一見すると医学史の専門書のようにみえるが、本書もまた、フーコーが長年にわたって進めた「思考の体系史」(Histoire des systèmes de pensée)の一部を構成するものである。とりわけ第八章「屍体解剖」で展開されている分析は、その後の「バイオ・パワー」の論点に密接に関連すると考えられるので、本論考では最初にとりあげておくことにする。

本書の副題は「医学のまなざしの考古学」(Une archéologie du regard médical)である。⁽³⁾各章では、病いの空間化の経緯、医療制度と施設の変化、医学教育と免許、施療院政策など、異なる切り口でこの「臨床医学の誕生」の様子を描いているが、全体の主題は、「序」の冒頭に書かれているように「空間(espace)」、⁽⁴⁾「言葉(langage)」そして「死(mort)に関する問い」であり、総じて言えば「まなざし(regard)に関する問い」である。

これを本論考のテーマである「バイオ・パワー」に沿って言い換えるならば「空間」は「身体」に、「ことば」は「知」に、そして「まなざし」は「力」となる。すなわち、十八世紀頃のフランスにおいて「身体」に向けていかに医学的な「知」が入りこんだのかを探ったのが本書、と言えるであろう。また、その「知」が以降においてどういった「力」をもっていたのかという問いかけこそが、後のフーコーの仕事に連なり、「バイオ・パワー」という概念に至ったと考えられるのである。

では、解剖学という新たな科学的な「知」が、一体何をもたらしたとフーコーは考えたのであろうか。一般的に言われるのは、解剖学が、人体の内部に介入する「権利」を獲得したために、さまざまな器官の病理学的連関が明らかになった、ということであるが、そのようにはフーコーは理解しない。解剖は以前より幾度も行われていた。そうでありながら、以前は諸器官に起こる反応やつながりなどが、「知」の関心とはならなかったのである。これは、身体(屍体)に向けられた「まなざし」が変わったのだ、とフーコーは指摘する。人体を切り開き、その内側の仕組みを分析するためには、それ相応の手続きが必要だったことは確かであるが、それ以上に、解剖学は、身体において展開される症状の解説を行う「知」を新たに作りあげたことに、大きな意味があるのである。

たとえば、十九世紀初頭フランスの医学者であるグザビエ・ビシャ(Xavier Bichat)は、死に至る身体の諸器官の変化をつぶさに観察し、

その結果、死というものが単純な「点」ではないということを発見する。それまでの医学の「知」においては、死はまぎれもない「絶対的な事実」であつたが、同時に、「最も曖昧な現象」でもあつた。これをビシャは、死というものが、無数の点の集まりであり、身体に分散しており、それらの一つひとつが緩慢に終焉、つまり不可逆的に停止してゆくものだ、ということを示した。ビシャが描いた「死」のあり方をまとめたフーコーの説明を引用しておこう。

「死は多様なものであり、時間の中に分散しているものである。それを起点として、時間が停止し、逆転するというような、そういった絶対的、特権的時点ではない。死は病いそのものと同じように、多くのものが集まっている存在であり、分析によって、時間と空間の中に配分されているものである。少しずつ、あちこちで、結び目の一つ一つが切れはじめる。少なくとも主な形においては、生体の生命が停止する。というのは、個人の死のずっと後まで、生命の小さな島が諸所に頑張っているのを、今度はごく小さい、部分的な、いくつかの死がおそつて、解体させることになるからである。」⁹⁾

私たちは「死」を、呼吸の停止、心臓の停止、瞳孔の散大を確認する「三徴候説」に基づいて判定されるもの、と考えがちである。これは言わば、「身体」が「死体」になる瞬間において「死」をとらえている、ということの意味している。しかし、このビシャの解剖学的な「まなざし」は、死を、時間的にも空間的にも、きわめて複雑に構成されている連続体のようなもの、として把握するのである。したがって、「死亡判定」された瞬間が「一つの死」「一つの点」であるとしても、その「死」、その「点」の前後には、無数の「小さな死」があることになる。そして、そのすべてに「まなざし」を注ぐのが、言わば、「生命」の「知」の役割なのである。

「死」は、ここににおいてはじめて「可視化」されることになる。可視化とは、すなわち、「可視性」(visibilité) によって「知」を可能にする（＝「可知」(intelligibilité) の獲得）ということでもある。「まなざし」は「知」を生み出すのである。

解剖学はこのようにして「分散する死」「多様な死」といった新たな「死」の認識を私たちに提供する。フーコーはここに、死の「生物学」的な死への転換をみている。それまで理解されていた「死」とは、根本的に異なる、と考えるのだ。

確かに、死亡がたった今確認された死者は、体が動かず、呼吸は止まり、脈拍もなく、瞳孔の反応もないかもしれない。しかし、この

時点では体はまだ温かい。また、脳も活動をやめたわけではない。逆に、身体的全体的な制御が困難になったためではあるが、肛門や尿道から排泄物が静かに流れはじめる。これは、「生命」的活動ではないか、という疑問も浮かぶ。しかも当面のあいだ身体は柔らかい。直接的な反応はないにせよ、時折、筋肉の痙攣が起こり、生き返ったのかと驚かされることもある。しばらくのあいだは、この「身体」を「死者」と呼ぶには、まだまだ生々しいのである。

このように、分散した死を多少なりとも文章で描写したり、理解するためには、解剖学がつくりあげた、死にかんする「知」が浸透していなければならない。ここに、大きな「生命」観の変容がある。だが、にもかかわらず、私たちの大半はこうした「死」のプロセスにかんする「知」を共有しているようにはみえない。それは、私たちが、こうした「死」の「知」を、医療機関やその専門家たちに委ねているからである。そういうものとして「死」を受け入れている。私たちにとっては、この死の「分水嶺」つまり「死亡の宣告」と「死亡診断書」を医者から得ることが、基本的な「死」との向き合い方であり、当の本人の「死」の過程にかかわることはむしろ困難な状況になっている、とも言える。しかも、死後でさえその「身体」は、死因を追跡するために解剖が行われることもある。「身体」は完全に医学という「知」にとつての重要な対象であり、こうした処置に基づいてさまざまな「力」が張りめぐらされていたと考えられている。解剖学が「死」をプロセスと広がりとしてとらえたとき、歴史的には決定的な断絶点となった。これこそが、フーコーが最初に「生命」にかかわる問いを提起した内容であるだろう。

二 博物誌から生物学へ

フーコーの見立てよれば、「生命」という概念は、十八世紀以降に生まれたものである。これは、彼の代表作である『言葉と物』で指摘されているように、「博物誌(histoire naturelle)」から「生物学(biologie)」への知のあり方の変容と結びついている。⁽⁵⁾ ここにおける「生命」は、「生物学」の対象なのであるが、ここには、前述した『臨床医学の誕生』において見出した「生命」に対する「知」の「力」の作用に關する見識が盛り込まれている。

一九六六年に刊行された『言葉と物』は、一見するとなら必然性がないかのように「労働(travail)」「生命(vie)」「言語(langage)」と

いう三つの主題を中心に据えて、「経済学」「生物学」「言語学」という三つの「知」の分析が展開されている。しかも、これらは、十九世紀以降に形成された「知」であって、それ以前の、十七～十八世紀において形成された知とは、はっきりと区別されている。一般的には「生物学」の起源には、必ず「博物誌」が据えられているが、こうした連続性をもったとらえ方には、大きな誤りがある、とフーコーは考える。この両者には、「知」における「認識論的切斷(coupure épistémologique)」があると、みなされている。

フーコーは、生物学は博物誌を継承したものではなく、別物ととらえる。なぜならば博物学は、生物学とは異なる「知」の枠組みをもっており、それを通して「生物(vivant)」の有様を学問的にとらえようとはしていたが、生物学のような「生命(vie)」という「対象」は、そこにはなかったのである。

これをごく簡潔に言い表せば、可視の対象にそれぞれ名称を付し、「相似」と「差異」に基づいた分類が試みられたのが博物誌というものであり、解剖学が行ったのと同様に、「生命」としてのさまざまな器官や組織のつながりに着目した結果得られた知見が、生物学なのである。

一見、同じような対象をもっているが、ここには、「生物の記述」から「生命の分析」へと「知」の目指すものが根本から異なっていることをフーコーは強調する。

もちろんこれは、博物誌という「知」に「生命」がまったくかわっていなかった、ということの意味するものではない。

「実際、十八世紀末まで、生命というものは実在しない。ただ生物があるのみである。生物は、世界のあらゆるものの連なりのなかで、一つの分類階級、いやむしろいくつかの分類階級を形成している。そして、生命について語るにしても、それは単に、さまざまな生物があまねく分布しているあり方の一つの特徴としてでしかないのだ。」⁷⁾

しかし生物学は、いわば「生命」という概念を支えにして展開されてきた学問であり、それは解剖学がそうであったように、単に表面の可視的なものだけを収集し外見による類似性によって分類するのではなく、内部に形成されている複雑な構造を明らかにしたうえで、その表面と関係づけねばならない「知」なのである。

このように「生命」という概念は、解剖学のみならず生物学という「知」においても重要な意味をもっていたのである。

しかし、では、この「生命」という「知」が一体何をもたらしているのだろうか。そのように思考することこそ「知」の「力」を問うことになる。にもかかわらず、フーコーは残念ながら『言葉と物』においては「力」にはふれずに書を終えている。

『言葉と物』においては、こうした「知」の変化そのものを詳細に追跡することに専念しているようにみえ、「力」に関する考察は直接的には行われていない。フーコーが「力」を主題としたのは、一九七〇年以降であり、しかもはつきりと新たな概念として説明を行ったのは、一九七六年に刊行された『性の歴史Ⅰ 知への意志』^⑧においてである。しかし、後に判明するように、こうした「知」が新たに構成される際には、必ず「力」が生じているのであって、それは「生命」にかんする「知」においても例外ではないはずである。

そこで、本稿では、フーコーの明確な定義づけを待たずに、この文脈から言える最低限のことだけをまとめておくことにしたい。

フーコーが「生命」に焦点をあて、暗に示そうとしているのは、「知」が「力」である、ということである。こう書いてしまうと、十七世紀初頭イギリスの哲学者であるフランシス・ベーコン(Francis Bacon)の「知は力なり」(Scientia et potentia humana in idem coincidunt)を想起^⑨させてしまうが、ベーコンが言いたかったのは「知」というものが観照にすぎないのではなく、現実的に効力があるということであり、もっと具体的に言えば、当時において自由学芸と異なりあまり評価されていなかった工学や技術(すなわちメカニカル・アート)も有益な学問だ、ということである。フーコーの「力」概念とはまったく異なるのである。

フーコーの「力」は、こうしたベーコンの言うようなはつきりとした「効力」ではない。むしろ不可視のものであり、「知」の影響を指している。その「知」が私たちの考え方や暮らしに直接的というよりも間接的、潜在的に与えている影響を「力」と呼んでいる。

それゆえ、フーコーにとって「力」と「知」とは密接に関連しているので、しばしば「力・知」(pouvoir-savoir)と呼ばれたのである。^⑩

しかし、これを「権力・知」と表記すると、「権力」という言葉が、かえって、こうした「知」のもつ性質を混乱させてしまうであろう。もちろんそれゆえ、この「力」は物理(学)的な「力」とも等しくないのである。

では、なぜ「生命」というものをとらえるような「知」が必要とされたのか。なにをもたらしただのか。フーコーの問いは、「知」(学問を含む)と制度(空間を含む)の網の目のなかで、「生命」という概念において、新たな「経験」が生み出された、これが「力」なのだ、というように考えられるであろう。

さらにもう一步進めて言えば、『言葉と物』は、この「生命」概念をさらに拡充し、「人間」という概念の出現の重大さを強調している。だが『言葉と物』は、対象が「経済学」「生物学」「言語学」といった人文社会科学であったために、各々の記述における「力」の発生を追いかけるあまり、社会においてどういった「力」をもたらしているのかを、はっきりと分析してはいなかった。この分析へと進んだ代表作が、『監獄の誕生』である。

三 社会と力

一九七五年に刊行された『監獄の誕生』は、その名のとおり、「監獄」という制度、技術、実践、習慣が、どのように生まれ、どのように作用しているのかをテーマにしている。⁽¹⁰⁾ 基本的な構図は『臨床医学の誕生』や『言葉と物』と同様に、西洋近代すなわち十九世紀以降とそれ以前における認識（思考）のあり方の断絶を強調している。

はじめに十八世紀半ばに行われた「身体刑」という直接的で可視的な刑罰の制度をとりあげ、それと対比的に、その後普及することになる「監獄」などにおいて活用された「ディシプリン(discipline)」の特性を分析してゆく。

「ディシプリン」はフーコーの著作においては「規律・訓練」と訳されている。もちろん「ディシプリン」という一つの処置方法は、修道院や軍隊などにもみられたのだが、この近代において活用されたのは、もっと端的に「身体」を管理する技術(technologie)としてであった。具体的には、常にその「身体」を監視下に置き、あらゆる「身体」の細部に規律を浸透させるような訓練や試験を実行し、その結果、身体表面に烙印を押すような処置ではなく、身体そのものの使い方を内面化（自動化）させて、命令を必要とするような強制としてではなく、自然にそうすることを欲するような状態に至らせる（＝規格化(normalization)）のが、「ディシプリン」の技法である。

この「ディシプリン」は、どんな行動に対しても整然と対応できる経済性を持ち、近代社会の法的・政治的な基本原理である自由平等を下支えするような暗黙のとり決めごととして機能し、数々の制度・施設に応用されることによって同時に「知」を生み出すものであった。

そのため、監獄や兵営はもちろん、学校や病院、職場など、社会のなかのさまざまな組織、制度、空間、施設にこの「ディシプリン」

は活用される。しかし間違っただけではないのは、先述したように、このように「身体」に作用するものは「力」であって「権力」ではないということである。いや、正確には「権力」や「監視」「管理」と呼ばれるものもあるのだが、フーコーはそういったネガティブなものとして「力」をとらえない。実際にこの「ディシプリンの「力」には、高い生産性が保証されているのである。

さて、このように「ディシプリン・パワー」は、個々の「身体」をめがけていた。言い換えれば「身体」はさまざまな「力」の網の目のなかで、見事に「ディシプリン」に慣れ親しみ、「ディシプリン」を自らの「知」と同一視するに至るのである。

このように説明すると、ただちには「生命」と結びつかないような印象を抱くかもしれないが、そうではない。フーコーは「生命」をめぐる「知」と「力」の問題には、二つの次元がある、と後になって述べている。¹¹⁾

① 解剖・政治学(anatomo-politique)

② 生命・政治学(bio-politique)

第一の「解剖・政治学」は、これまで第一章でみてきたように、「身体」を対象とするもので、各々の身体への解剖学的関与が行われ、後に本章でふれるように、監視・訓育的関与が行われる一連の流れを指し示す。第二の「生命・政治学」は、第二章でとりあげられた「生物学」の手法が「人間」の集まりにも適応されたと考えればよいのだが、それにとどまらず、その「人口」(社会)への総体的な管理手法全般を指すものである。この両者についてフーコーはある論考で「全体的かつ個別に(Onnes et Singulatum)」と端的に表現している。¹²⁾

「生命」に対する「力」とは、このように、全体的には「社会」への「力」であり、個別的には「身体」への「力」のことである。『監獄の誕生』(一九七五年二月)と『性の歴史Ⅰ 知への意志』(一九七六年二月)が、わずか一年十ヶ月ほどの違いで刊行されているにもかかわらず、一見両者が全く異なるテーマを論じているようにみえるが、実は、このように「生命」に対する「力」の二面性についてそれぞれ考察していたと考えるべきなのである。¹³⁾まるで、比較的なじみやすい前者、すなわち権力者から抑圧され監禁されることへの抵抗に注目しても、すんなり理解できそうな主題をフーコーは『監獄の誕生』で提供しつつ、同時に(ただちに)、『性の歴史』において、そうした「抑圧の仮説」の不毛さを暴露し、「生命」もしくは「身体」がいかなる形でこの「知」の「力」に左右されてゆくのか、こうした

微妙な差異と深いつながりをもつ「二つ」のテーマをそれぞれの著作で論じていた、と考えられる。

四 生命と力

「バイオ・パワー」という概念が最初に提示されたのは、一九七六年三月十七日、すなわち、一九七五年度のコレージュ・ド・フランスの講義「社会を防衛しなければならない」においてである。⁽¹⁴⁾そして、その後、一九七六年八月に書き終え一二月に刊行される『性の歴史Ⅰ 知への意志』の第五章「死の権利と生への力」で本格的にとりあげられた。⁽¹⁵⁾

その後一九七七年から一九七九年に至る三年間、「バイオ・パワー」もしくは「バイオ・ポリティクス」は、フーコーの当時の最大関心事の一つであり、コレージュ・ド・フランスでは、一九七八年度には「安全・領土・人口」というテーマで、そして一九七九年度は「バイオ・ポリティクスの誕生」というテーマで、それぞれ講義が行われている。⁽¹⁶⁾

しかしこの間の研究は、まとまった著書としては発表されない。一九八四年に刊行された最後の著作である『性の歴史Ⅱ』と『性の歴史Ⅲ』は、古代ギリシア・ローマにおける同性愛や自己修養などに焦点をあてたものであり、「バイオ・パワー」という主題は、少なくとも、直接的には扱われず、そのまま宙吊りにされてしまったのだ。⁽¹⁷⁾

とはいえ、これまでみてきたとおり、著作としては形にならなかったものの「バイオ・パワー」が、フーコーの仕事においてかなり重要な位置にあったことは間違いない。断片的ではあるが、残された文章からその意味を明らかにしておきたい。

まず「バイオ・パワー」を説明しようとするフーコーは、「力」概念が「権力」とは異なることを強調する。力は上からやってくるのではなく、「下から来る」のである。フーコーの「力」の定義は、以下のようにまとめられている。⁽¹⁸⁾

- ・力は、無数の点を出発点として、不平等かつ可動的なゲームのなかで行使されている。力は、実体ではない。
- ・力関係は、内在的なものであり、分割や不平等、不均衡の直接的な結果として作動している。力関係は、なくなるものではない。
- ・力は、下から来る。力は、上から行使されるものではない。

- ・力関係には、必ず理由や意図がある。力は、特定の人物や組織などによって実行されるものではない。
- ・力には、必ず抵抗がある。人は常に力のただなかにおり、力から逃れることはできない。

さらに、バイオ・パワーが作用しているなかで、次のような変化が起こった、とフーコーはとらえている。

「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わって、生きさせるか死のなかに除去するという力が現れた。」⁽¹⁹⁾

文の前半にある「死なせるか生きるままにしておく」というのは、近代以前の主従関係、主君のもとに統治される共同体が想起されている。この共同体においては、主君は、臣民を、基本的に「生きるままにして」いるだけであり、何かあれば一方的に有無を言わず「死」を命ずる。つまり、生殺与奪権というものが作動している。主君はこの生殺与奪権を握っており、いつでもこの権利を行使できるのだが、たまたま、それを控えているのが、臣民の「生」のありさまである。

こうした、かつての主従関係について、フーコー自身はこれ以上論究していない。しかし、対比させるという意味で、もう少し説明補充をしておきたい。そのために、ここで、十九世紀初頭を生きたドイツの哲学者ヘーゲルの有名な「主と奴の弁証法」⁽²⁰⁾について、簡単にふりかえっておく。

ヘーゲルの場合、「主(Herrschaft)」は「奴(Knechtschaft)」を殺そうと思えばいつでも殺せる。「主」は「奴」を完全に支配している。しかし「奴」を殺すことは「延期」したうえで、生かしたままにしておくことを選択する。「主」にとっては、「奴」を生きさせたままにしておくことにより、自分を「主」と承認する「対象」を獲得できるという利点があるからである。しかしもう一步退き、全景を反省的に把握しようとする、そもそも「主」とは最初から「主」だったわけではなく、こうした「奴」による承認を受けつつ「主」となっていくのである。そしてさらに言えば、自分が「主」であり続けるためには、「主」は、「奴」を生かし「承認」を獲得し続けることが必要なのである。

ここには、奇妙な転倒が発生している。「主」はすでに「主」として自立してはおらず、「奴」があつてはじめて「主」でいられることに

なる。「奴」なくしては、「奴」の承認なくしては、「主」たりえない。

一方このとき、「奴」の側では、自らを縛りつける「主」よりも上位に立とうとさまざまな努力を行い、立場の逆転を狙っている。実際に関係が変わることもありうる。つまり「主」と「奴」は、相互転換が可能なのである。むしろこの相互転換の可能性が、人類の歴史を進歩させてきた、とヘーゲルはみなす。

つまりここにあるのは、相互承認を前提とした他者関係である。「主」であれ「奴」であれ、闘争や葛藤があるとはいえ、自己と他者が共に生きることが前提とされている。フーコーの言う「死なせるか生きるままにしておくという古い権利」とは、すなわち、「他者」規定を前提とした「倫理」の「力」の規定である、とすることができ。

これに対して、「生きさせるか死のなかに除去するという力」とは、最終的には「死のなかに除去」される運命にあるが、生きているあいだは、「生きさせ」られている、というものである。「生きさせ」られている、という言い方は、受動的、他動的、もつと言えば自暴自棄的にも響くが、実際には、もう少し曖昧なものであり、少なくとも、一方的、強制的と言えるものではない。

これは、一般的には「福祉社会」と呼ばれる社会が想定されている。「生きる」ことは、本人よりも社会が責任をもって行わねばならない「業務」として実行されている社会である。もちろんこの「業務」は決して暴力的でも、高圧的でもない。むしろ、サービスとして、ケアとして、きわめて謙虚に提供される。ただし、この「生命」が「生きる」ことを停止した後は、その「仕事」が終わり、無関係になるために「死のなかに除去」される、ということである。

先ほど述べた、ヘーゲルのとらえた市民社会においては、「主体」は、社会的には「主」もしくは「奴」といった「力」関係のただなかに必すかわわっていた、と言える。「主」とは「奴」に権力を行使する立場もしくは役割を担う者であった。そしてこの権力に服従する主体としての「奴」も不可欠な存在であった。言うなれば「主」も「奴」も相手の存在を前提として成り立っており、相互依存的であった。

これに対してフーコーは、ヘーゲル的な「支配・被支配」的な「権力」もしくは相互承認に基づいた他者関係において現れる「力」関係というものは、まったく異なる「力」を描き出そうとした、ということになる。

「力の関係の原理には、一般的な母型として、支配する者と支配される者という二項的かつ総体的な対立はない。その二項対立が上か

ら下へ、ますます局限された集団へと及んで、ついに社会体の深部にまで至るといった運動もない²¹⁾」

こうした「力」の定義づけは、少なくとも従来型の社会科学やヘーゲル哲学における「権力」概念とは、大きく異なっている。いずれかの「力」概念が正しいか否かは私には判別する術はないが、少なくとも、現代社会における「力」というものを考えるときに、フーコーが提示した「バイオ・パワー」は、一定程度以上の意義があるように思われる。

実際にフーコーは講義録において、もう少し具体的な例を提示している。たとえば「安全、領土、人口」と題された講義録においては、冒頭で要約的に「バイオ・パワー」に言及している。すなわち「バイオ・パワー」とは「ヒトという種における基本的な生物学上の特徴が、あるポリティクス（ある政治的戦略、ある一般的な権力戦略）の内部に入りこめるようになるにあたって用いられる、さまざまなメカニズムからなる総体のこと」と定義づけられている²²⁾。

そしてこのあと、都市計画における「バイオ・パワー」の作用について「人工的環境の内部にヒトという種の「自然性」という問題が闖入してくる」もしくは「力関係という政治的な人工性の内部にヒトという種の自然性が闖入してくる²³⁾」というように述べられている。つまり、都市計画においては、「環境」と呼ばれる要素をその設計のなかに埋めこみ、実際に、そこで暮らす人たちがその「環境」に知らず知らずのうちに影響を受ける場合「バイオ・パワー」が作動したということになる。言ってみれば、さまざまな配慮のもとに街中に備えつけられている「環境設備」それが「バイオ・パワー」のみなものである。

ここには「監視」や「調教」といった直接的な身体への介入がない。まさしく「バイオ・パワー」は「権力」というよりも「力」である。もつと言えば、明確さや可視性をもたない「力」である。すなわち、あたかも「自然」であるかのようにデザインされた空間、施設、道具、サービス、そしてその「作用」もしくは「効果」、さらには「調整」が「バイオ・パワー」であり、これは曖昧かつ間接的ではあるが、同時に、私たちの暮らしに、根元的かつ決定的な影響を及ぼすものである。

さて、以上のように、現代社会においては、二つの軸をもって、「社会」（つまり、「身体」と「人口」）に「力」が作用している、とフーコーは考えたことになる。

① デイシプリン・パワー 身体の矯正（アジャストメント）

② バイオ・パワー 人口への調整（レギュレーション）

男女に家庭をもたせて性交や出産をきちんと行わせ、身体を細やかにチェックし、健康状態を維持し、長寿を全うできるように、①は、各個人（の身体）に対して、②は、人口（社会全体）に向けて、労力を使うことである。つまり①は『監獄の誕生』において詳細につきとめられたものであり、②は『性の歴史Ⅰ』ならびにコレージュ・ド・フランスの講義などで検討されたものであった。

とりわけ今や、すでにヘーゲルが提示した相互承認論や「権力」という言葉が使えないほどに「バイオ・パワー」は、間接的かつ曖昧に「環境」全体を構成しているか、もしくはさりげない「装置」として作用している、と言えないだろうか。これはある意味では「快適」と表現されるかもしれない。もしくは「安心」とみなされるかもしれない。だがはたして「バイオ・パワー」というのは、単に、適当にやり過ぎせる程度の対象、「背景」的なものにすぎないのだろうか。私たちはこの「力」とどう向き合えばよいのだろうか。

五 倫理における力

「バイオ・パワー」概念を用いた批判的検討としては、多くの欧米人研究者は、「アウシュヴィッツ」問題へと引き寄せている。⁽²⁴⁾ もちろんフーコー自身がナチズムならびにヒトラーについて言及もしている⁽²⁵⁾ので、それが誤りだとは言わない。しかし同時にフーコー自身が「核兵器下の状況」⁽²⁶⁾についてもふれているということを、私たちは見逃してはならない。

「核兵器下の状況は、今日、このプロセス「大量虐殺」の到達点に位する。一つの国民全員を死にさらすという力は、もう一つの国民に生存し続けることを保証する力の裏側にほかならない」⁽²⁷⁾

これは、自分たちが「バイオ・パワー」を基盤においた社会で快適に生き続けようとするならば「敵対する国」（もしくは敵対化させた人種や民族）を抹消してしまえるほどの「力」を用意せねばならない、ということを示唆しているのではないだろうか。

もしくは、自分たちが他者からジェノサイドの対象とされたくなければ「バイオ・パワー」がくまなく及ぶなかで、穏やかに生かし続けられる道を選ぶ、ということであろうか。

人々は、知らぬ間にこの選択肢の前に立たされ、否応なく「生かされ」ている。

そして、少なくともこの一文は、「バイオ・パワー」が、二つのジェノサイド、すなわち「アウシュヴィッツ」のような出来事、そして、「ヒロシマ（ナガサキ）」といった出来事と、無関係ではないことを示している。

さらに、フーコーの力点が「生きさせておく」だけではなく「死の中へと排除する」ことを問うことにもあるということにも注意せねばならない。「生きさせておく」と「死の中へと排除する」が、いずれか一方のみで成り立っているわけではないということ、さらに言えば、ヘーゲルがとらえたような他者との相互関係とは異なる、ジェノサイドと平和的な生活との、ある種の相互依存関係を、ここに見るべきなのである。

したがって、こう言える。

「バイオ・パワー」とは、一方では、私たちの日常のように快適に「生きさせておく」ように作用する。また他方では、「アウシュヴィッツ」や「ヒロシマ（ナガサキ）」といった「死の中へと排除する」ようにも作用する。しかもこの両者は、一方のみで成立しているものではなく、相互に依存しあっている。そしておそらく今、私たちが「フクシマ」と呼んでいる出来事は、この両者のせめぎ合いを意味するのだ、と。

ただし、「バイオ・パワー」とは、ある出来事、ある記憶、ある場所に極限されて作用するのではなく、くまなく私たちの「生」に対して作用しており、私たちは、終始、この分岐点、選択肢の前に立たされているにすぎない。この選択肢が、もつとも鮮明に、そしてむしろその境界線がもつともあいまいになったのが、原発事故である。今までも、これからも、放射能の影響が不可視であることは変わらないが、事故のあと、この可視化できない「バイオ・パワー」というものが、私たちの社会（人口）に張りめぐらされていたことを、私たちははっきりと「可視化」したのだ、という言い方ができよう。

正常なものと異常なものを区分し、異常なものを一ヶ所にまとめ監視し矯正をはかる近代の監獄や学校、病院、兵舎といった空間を構成する手法、生物種として「人間」を規定し、同じ種の「人間」を各地より集め、効率よく殺戮したナチの手法、戦争を終わらせるためという理由で、核分裂反応を利用した爆弾を投下し、戦闘員が非戦闘員かの区別なく、「無差別に」均等に「その一帯を破壊する手法」、これらはいずれも、「知」を通じて「生命」に「力」を及ぼすような、同じテクノロジーであった。

フクシマも同様であった。安全でクリーンなエネルギーを生み出し、しかも地元の活性化に役立つということで設置されたものの、シビアアクシデントの事態を想定しておらず、事故が発生すると、避難区域や危険区域を生み出し長期間そこで生活できなくなるような施設を運営する手法は、「バイオ・パワー」の「賜物」であったというほかない。

むすび

以上のように、「バイオ・パワー」は、フーコーが遺した重要な概念であり、私たちの生存状況とその倫理を考えるうえで、きわめて有効である。しかし、むしろ私たちにとって今問うべきなのは、「バイオ・パワー」ではなく、「アトム・パワー」なのではないだろうか。

戦後以来、原爆被害、原発事故被害を経験してきた私たちが問うとすれば、「アトム」の「パワー」なのではないか。

身体を不可視に貫き、遺伝子レベルにまで影響を及ぼす「アトム」の「パワー」は、「バイオ」以上に、私たちの日常、社会、倫理などに大きな影響を与えているはずである。もし与えてこなかったとすれば、それは、何らかの「操作」がなされてきたからである。その「操作」が「バイオ・パワー」とみなされる。具体的にはこの「バイオ・パワー」は、かつての「原爆」における「アトム」の「パワー」を、本来の「アトム」とみなさず、単なる「悲惨な出来事」もしくは「アクシデント」として片づけ、その後の「平和的利用」としての「アトム」である原子力発電所をオブラートに包みこみ、かろうじてうまくやってきたのが「戦後」だったのではなからうか。

しかし、二〇一一年三月十一日、その目を境に、この神話は幻想となった。私たちは、ようやく「アトム」の「パワー」というもののを目の当たりにした。いや、正確には見えてはいないが、「理解」した。不可視であるにもかかわらず「可知化」したのだ。それは、単に強い放射能を浴びると即死するおそれがあるというだけのことではない。自分たちが「アトム」の「パワー」という現実に生きていること

を知ることとなったのである。不可視であり、無臭であり、不可触であるにもかかわらず、拡散ははてしなく地球全体を覆い、その影響は世界史の次元をこえ、人類史、地球史において考察せねばならぬほど長期にわたる。この事実のなか、私たちは、そして私たちの子孫は、生きることになる。これは、一過性のものではない。日常として、暮らしとして、生活として、毎日続く（もしくはこれまでも毎日続いてきた）「出来事」である。⁽²⁸⁾そしてそれこそが、この「バイオ・パワー」の特性なのである。

にもかかわらず、一部の知識人、政治家、マスコミ、そしてインターネットにおけるソーシャルネットワークなどに書き込みをする人たちは、この重大な論点、変化、転換を、真剣に考えようとせずに、事故の収束、事態の安定化などをいともたやすく語りはじめている。だが、忘れてはならない。「アトム」の「パワー」が張りめぐらされている（ことに気づいて生きることを余儀なくされる）時代は、今はじまりを告げたばかりであることを。安心したい気持ち、元の日常に戻りたい気持ちは、分らないでもないが、もうかつてのような安心は帰ってこないということを、もう元の日常には戻れないということを、私たちは、一時たりとも忘れてはならないのである。それだけが、私たちができる、この事故に対する倫理の問い方であるように思われる。

「倫理」における「力」とは、単純に実践や行為にかかわる、ということではない。むしろ「倫理」における「知」を磨くことこそが「力」である。「アトム・パワー」を「バイオ・パワー」と対比させて問うことそのものが「倫理」の「力」である。⁽²⁹⁾

生命と力——フーコーの「バイオ・パワー」概念をめぐる〈要旨〉

瀧本 往人

本論考は、二十世紀フランスの代表的な哲学者であるミシェル・フーコーが提示した「バイオ・パワー」という概念を手掛かりにして、倫理における「力」という問題を考える。

第一章では、初期の著作『臨床医学の誕生』から「生命」と「力」の関係の発見の発端を見出す。フーコーは、十八世紀に解剖学が「死」を死体の内側からとらえ、その結果「死」が身体に分散しているさまを明らかにしたが、この光景をもつてフーコーは、「生命」への「力」の介入の出発点としたのではない。

第二章では、代表作『言葉と物』における、古典主義時代から近代的な知への移行の分析のなかの、「博物誌」から「生物学」への転換に焦点をあてる。「生物学」は、「博物誌」とは不連続に「人間」に関する「知」の一つとして生成したことが提示されているが、この書では用いられていない「知／力」という概念に基づけば、「生物学」の分析の意味を解釈し、「知」が「生命」の学を構成するという「力」を作用させたという意味ではない。

第三章では、『監獄の誕生』において、具体的な「力」の一つとして検討された「ディシプリン・パワー」を概観する。これが単に「知」のみならず、実際の空間や身体において作用するものであるが、一般的に管理社会批判の文脈で論じられる傾向にあるのに対して、「バイオ・パワー」との相関で再検討してみた。

第四章では「バイオ・パワー」について、フーコーの論点を素描し、特に、「アウシュヴィッツ」に焦点をあてた研究が主流であるなかで、あえて「アトム・パワー」を「バイオ・パワー」の後継もしくは類似した概念として提唱した。

第五章では、このようにして「倫理」の問題に「力」を導入したフーコーの意図を受けて、この「アトム・パワー」のなかで生きる私たちの「倫理」と「力」のあり方を展望する。「倫理」における「力」は、単純に実践や行為にかかわる、ということではない。むしろ「倫理」における「知」を磨くことこそが「力」であると結論づける。

註

- (1) 代表的著作としては、ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社、二〇〇三年。Giorgio Agamben, *Homo Sacer: il poteresovrani e la nuda vita*, Giulio Einaudi Editore, 1995.
- (2) Michel Foucault, *Naissance de la clinique: Une archéologie du regard médical*, P.U.F., 1963(1972). ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳、みすず書房、1969年〈旧版の翻訳〉
- (3) 一九七二年の第二版においては、この副題は省かれている。
- (4) Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, pp.14-5, 邦訳一八六～七頁
- (5) Ivan Illich, *Medical Nemesis*, Pantheon, 1976. イヴァン・イリッチ『脱病院化社会』金子嗣郎訳、晶文社、一九七九年
- (6) Michel Foucault, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966. ミシェル・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、一九七四年
- (7) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, p.173. 邦訳一八三頁。
- (8) Francis Bacon, *Novum Organum*, 1620. フランシス・ベーコン『ノウム・オルガヌム』桂寿一訳、岩波書店、一九七八年
- (9) Colin Gordon(ed.), *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other writings 1972-1977*, Pantheon, 1980. 「力・知」という概念は、英米圏では本書によって広く知られるようになった。また国内では、フーコーの死後緊急出版された、福井憲彦・桑田禮彰・山本哲士(編)『ミシェル・フーコー 一九二六～一九八四 権力・知・歴史』新評論、一九八四年、に負うところが大きい。
- (10) Michel Foucault, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard, 1975. ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳、新潮社、一九七七年
- (11) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Gallimard, 1976, p.183. ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、一九八六年、一七六頁。
- (12) Michel Foucault, "Omnes et Singulatum: Towards a Criticism of 'Political Reason,'" in Sterling McMurrin(ed.), *The Tanner Lectures on Human Values II*, University of Utah Press, 1981, pp.225-254.

- (13) 桜井哲夫『フーコー知と権力』講談社、一九九六年
- (14) Michel Foucault, *Il faut défendre la société: Cours au Collège de France 1975-1976*, Gallimard, 1997, pp.216-226. ミシェル・フーコー『社会を防衛しなければならぬ』石田英敬・小野正嗣訳、筑摩書房、二〇〇七年
- (15) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, pp.177-211, 邦訳一七一～二一〇三頁。
- (16) 一九七七年度は休講。Michel Foucault, *Sécurité, Territoire, Population: cours au Collège de France 1977-1978*, Gallimard, 2004. ミシェル・フーコー『安全・領土・人口』高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七年。Naissance de la biopolitique: cours au Collège de France 1978-1979, Gallimard, 2004. 『生政治の誕生』慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇八年
- (17) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité II: L'usage des plaisirs*, Gallimard, 1984. ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』田村俣訳、新潮社、1986年。
Michel Foucault, *Histoire de la sexualité III: Le souci de soi*, Gallimard, 1984. ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』田村俣訳、新潮社、一九八七年
- (18) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, pp.121-129, 邦訳一一九～一二四頁。
- (19) *ibid.*, p.181, 邦訳一七五頁。
- (20) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, 1807(Suhrkamp, 1970), pp.145-155. ヘーゲル『精神現象学』櫻山欽四郎訳、河出書房新社、一九七三年、一一五～一二三頁。
- (21) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, pp.124, 邦訳一二一～一二三頁。
- (22) Michel Foucault, *Sécurité, Territoire, Population*, p.3, 邦訳三頁。
- (23) *ibid.*, p.21, 邦訳二六頁。
- (24) James W. Bernauer, "Beyond Life and Death: On Foucault's post-Auschwitz Ethic," in François Ewald(dir.), *Michel Foucault Philosopher*, Harvester, 1992(orig. Seoul, 1989), pp.260-279.
- (25) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, p.197, 邦訳一八八頁。
- (26) *ibid.*, p.180, 邦訳一七四頁。

(27) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, p.180, 邦訳一七四頁。

(28) もっと根源的に言えば、「アトム」の「パワー」とは、原発事故などで拡散する放射線のみならず、可視光線や赤外線、紫外線、電波などを含む「電磁波」という、原子核内にある電子の移動や自転などの「力」、すなわち「電界」と「磁界」がこの世にもたらす「力」をも包含するものと考えるべきである。

(29) フーコーの遺作となった二冊の『性の歴史』は、この「生命」と「力」の問いを「倫理」の「知」として投げかけたものだと言えよう。